
占夢者人の夢 ～ 弐ノ巻・前編～

星河 翼

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

占夢者人の夢 ㄥ 式ノ巻・前編ㄥ

【Nコード】

N5499D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

天使は全てを知っている・・・この言葉がキーワード。事件に絡む悪夢と、霊。都住朔夜の婚約者、錦織神楽の登場と、塚原叶の悪意ある事故。ミステリー調で始まる、式ノ巻き前編をお楽しみください。

#1 プロローグ

閑静な町並みに吹き抜けて行く風。既に太陽は地平線を通り抜け、冴えざえとした満月が頭上にある。都会の空気は全てを飲み込んでしまふかのようで、息苦しく感じられ、ビルの屋上に素足で立っている一人の女性はまるで何かに誘われるかのように足を踏み出していた。

一歩一歩踏み出して行くその足取りは、ふらついてはいるもの、しつかり意識はあった。右手に持った、一枚の紙切れは風に煽られ『カサカサ』と音を立てる。そして右手には今風のサンダル。それからその紙をサンダルで押さえるかのように、ビルの縁に添えると、引き込まれるかのように、その一歩を踏み出した。まるで背中に羽根が生えているかのごとく。

天使は全てを知っている

最後に残された言葉は、何かを暗示するかのように、ただその場所に残されたのである。

#1 プロローグ（後書き）

前編と後編に分けております。

占夢者人シリーズ。壱と番外編を先に読まれておりますと、よりキ
ャラ配置はわかりやすいと思われませ。

もし宜しければそちらもご覧下さいませ。

#2 憂鬱

憂鬱

今は夏まつさかり、地上に照り付ける太陽光線は、素肌をじわじわと焦がして行く。たまに降る雨は焼けたアスファルトを叩き付けるが、雲模様はすぐに変わり蒸し暑さをかもし出し、このアパート中にその代償を払えと云わんばかりに責め立ててくる。

そんな、起きだちの塚原叶は団扇を煽ぎつつ、吹き出してくる汗を首に掛けているタオルで拭いながら、テーブル脇に有るリモコンでテレビを付けた。

『昨夜の事件です……』

画面を見る事無くただアナウンサーの声に耳を傾ける。テレビは共有の場所、ダイニングキッチンの端に設置されてはいるが、基本的に叶が独占する形がこの共同生活の掟のようになっていた。

『東京、下北沢で、二十才前半の女性が〇〇マンションの屋上から飛び下り自殺をはかると云う事件が起きました。警察は今、この女性の身元及び、動機を調べること……』

流れて行くスラスラと発せられるセリフを聴きながら今気が付いたとばかりに、冷蔵庫から冷えた麦茶をコップに注ぎ込む。そして一気に飲み干す。

「なあ……ここんとこ下北沢での事件多いか？」

そう、どういう訳かここ最近の下北沢は殺人事件を始めに自殺、強盗と相次いで起こっている。

その事について意見を聞こうと既に起きて、自室で相変わらずネットを楽しんでいるであろう都住朔夜に問いかけた。

「……そうですね……」

しかし関心を払わない朔夜に、叶はまたいつもの事だと想っていたが、どうやらそう云う訳では無さそうなのが目の端に映り、

「なんや？ ネットに夢中にしとるんかと想えば、そう云う訳やないんやな」

珍しく、ノートパソコンの前で手を止めていて、心ここにあらずといった様であった。その様子を不思議に思い、団扇を片手に朔夜の部屋に入る。

「あ……まあ、色々……」

そこで黙り込んだので、ハッと気が付き、

「そついや、明日やったよな？ 都住家恒例の一族会議つてのは。明日は一日帰らんのか？ 年に二度の適例会議つても難儀やんな俺ならそんなもんぜつてえい！ ボイコットするわ」

顎に手を掛け未だ片付けられていない万年コタツの脇に『ドカツ』と腰を下ろす。

叶は、中学二年に家を出たきり一度も実家には顔を出していない。その後大学を何とか卒業するまで叔父、叔母の所で一緒に生活した後、これ以上お世話になる訳にはと、家を出て今ではこのアパートに居候しでいる。

「はあ」

この時期になると、溜め息がこぼれる朔夜を知っていて、この時ぞとばかりにいじわるな態度にでる叶。確かにこういう朔夜はいじめ甲斐がある。

「やつほ！ 明日はバイトも休みやし。朔夜もおらんし羽根のばせそうやなあ！ かえでちゃんと二人きりになるチャンスなんて滅多に無いから遊びに来てもらうように連絡とつとことと」

かえでに疎まれてる事くらい知っているのに、敢えてこう云う事を云って退ける辺りかなり図々しいかも知れないとは分かっている。でも、持ち前の前向きの性格は隠す事すら無い。

「食事は、冷蔵庫の中の物を適当に食べて下さい。そろそろ賞味期限の納豆が有るはずですから……」

おぼつかない言葉に覇気が感じられないが、一応反撃はしてくる。「納豆嫌いなん知つとるやろ……嫌みなやつちゃ！」

叶はそう云うと、
「ほな、バイト行くわ」
時計を確認し、さっさとドアを後にした。

都住家の適例会議は仕事の確認と、親戚達の内輪話といったもので、特別に憂鬱になる事などは一切なかったが、ここ二年間結婚に關しての話題が持ち上がっている。実はこの事が、朔夜の頭を悩ませていた。

もともと、父が熱烈恋愛結婚で落ち着いた話から始まって以来、離婚話で母と別れた事で親権問題が浮上、その事が一族の不名誉的要素を嫌というまで聴かされてきた。

そこで、朔夜にはそう云う事にならないようにと宗家の連中は既に許嫁と云う、古典的な方法を用いて朔夜の結婚相手を選んでいたのである。

相手は、選りすぐりの名家の出の錦織神楽（二十四歳）。大学も一流大学を出たばかりという、何も申し分の無いお嬢様である。しかも、都住家に関する事を理解している上に、祖母のお気に入りとしてきた。

それでも反論出来るのであれば何も問題は無いのだが、宗家には、父亡き後全てのスポンサーになってもらっている為に何も云い返せない。しかも、朔夜はその錦織神楽と云う女性に逢った事すら無かった。

「はあ、」
今一度溜め息がもれる。延ばし延ばしにしていた今までの事を想うと、きつと今度こそはと祖母は話を切り替えてくる事になるであろう。

そう考える度に明日が世界の最後であれば良いのにとまで想う程想いつめていた。朔夜的には都住家を存続させておく必要性を自ら負いたくは無かったのである。

#3 儀式

儀式

「うんじゃま、行ってらっしゃい。ごゆっくり〜！」

小憎らしいとも想える程の満面の笑みを携えて、居候の身の叶は、タンクトップ一枚に涼やかな扇風機を従えてキッチンの椅子に腰を下ろしながら朔夜を見送る。

それは、晴天の真夏の朝日が昇ったたそんな時刻の事。

それを尻目に一応微笑んでアパートのドアを後にする朔夜は、心の底から『身の程知らずめ』とボソボソと呟きながらも溜め息がもれる。

しかも、正装のスーツ姿が身動きづらくてまた一つ気分が優れない要因となっていた。

都住家は、ここから井の頭線に乗り渋谷に出て、山手線に乗り換え王子まで行かなければならない。

お盆前のまだ通勤ラッシュのこの時刻、考えただけでも人込みに弱い朔夜にとっては地獄絵図の中に身を投じる気分だった。それでも、王子の近くにまで来るとそう云う気配は無くなり不快指数は大分和らいだ。そして、重い足を引こずる気分で、宗家都住宅へと急ぐ事となる。

「まあまあ、暑い中良くいらっしやっただ事だわねえ〜朔夜さん」

一物も二物も隠し持っているかのような祖母は、朔夜の到着を笑顔で迎える。

「ご無沙汰しておりました。お元気そうでなりよりです」

父が亡くなつてから面倒を見てもらっていただけに、この家の事は何よりも良く判っているものの、他人行儀に、

「失礼します」

涼やか微笑みを浮かべながら、祖母の後に着いてスーツの上着を

たたむと腕に引つ掛けの中に入って行く。

『ミシミシ』と響く廊下の音は、あの頃となんら変わりはない。

この都住家は代々受け継がれてきた家柄をモットウとして立て直すと言う気配すらなく、庭にある獅子齋しの『カコーン』という涼し気な音すら格式を高めるかのように和風さながらの都会の一種の避暑地のようであった。

「お爺様は？」

通された座敷きの座布団の上で、まだ見えぬ祖父の事が気になる。いつもなら、先にこの場所に来ているのであるが……

「ここ最近、体調が優れなくて床に臥せっているのですよ。朔夜さんがこられる事を楽しみにしていらしたのに残念ですわ……」

暫くすると、奥の部屋から麦茶を入れたグラスとお茶菓子をお盆にのせ侍女が入って来る。

「奥様、失礼します」

冷えた麦茶のグラスが白く曇っているのを確認し、朔夜は一口口をつける。座敷きには、まだ他の親戚は来て無い様子で、二十畳の畳の部屋はがらんとしていた。その分空間が広く感じられ、自らの部屋との違いを嫌と云う程感じると、愛着有るあの部屋に早く帰りたいとさえ感じる。

「他の方々は？」

しかし、いつもの時刻にも一向に現れない事を確認した朔夜は静かなこの部屋で黙って祖母と向き合っただけばかりいるのもなんだなと感じ始め、切り出す。

「今回の適倒会議は、以前からお話していた朔夜さんの結婚話を改めようと想っていたので日にちをずらす事にしましたのよ」

率直すぎる祖母の発言に、『ついにきたか！』と朔夜は笑顔で微笑みながらも内心鼓動が鳴り止まない。

「その事でしたら、前にも云いましたが、僕にはまだそんなゆとりも気持ちもございませんので失礼させて頂きたく思います」

ここで抜け出さないと、畳み掛けてくるであろう？ことなど分か

り切っている。昔からの痛い経験は、朔夜に学習能力を持たせてくれた。この祖母の言葉は絶対なのだから……

「お待ちなさい、朔夜さん。逃げても無駄ですよ！」

朔夜が片足を立てたところで、逃がすものかと祖母は言葉を挟む。

「お入りなさつて！神楽さん！」

すると、先程侍女が入つて来たその襖が『ス〜』と開くと、一人の艶やかな御所車の和服姿をした一人の女性が、畳に指を付いて座っていた。

「こららが、朔夜さん貴方の許嫁の錦織神楽さんですよ」とすると、

「初めまして、わたくしが錦織神楽と申します」

静かに面をあげると、そこにはいかにも物静かでおっとりとした、（はつきり言つて朔夜好みの）女性の顔が、露になる。

「お話はお聴きになれてると想っておりますのですが……何か御都合の悪い事なのでしょうか？」

神楽は、見た目通り少し控えめに言葉を発する。

「あ……その……」

理想像の女性を前に、一瞬言葉をとぎらせてしまった事に、しまったと想うには遅かった。

「いいえ〜神楽さんお入りになられませ〜こちらにいらしてお話でも致しましょう」

祖母の思惑にハマったのである。

「ご存知だと思われませんが、こちらが孫の都住朔夜と云いますのよ。お会いになるのは初めてでございませよ？」

祖母は、ニコニコとしながら朔夜の事などお構い無しに話しはじめる。

「はい。お写真では拝見致しておりましたが、このように、実際お会い致しまして落ち着きました。お写真よりお優しそうな方なので大変安心致しました」

はにかむかのようなその笑顔が朔夜の中で、色鮮やかに映る。

「朔夜さん？神楽さんは、都住家の遠い親戚筋で、錦織家の御長女でらっしゃいますのよ。一流大学をお出になり、才色兼備。何も申し分も無い女性ですわ。しかも、朔夜さんのお仕事を理解されての縁談。これ程の縁は無いとまで想いますよ？」

祖母は、これ見よがしに段取りを進めて行く。

「あ……そうですね……でも……」

朔夜は返事に困ってしまう。理想像と、自分の人生をそう簡単に決められる訳には行かないのとの二つで蠢いていたからである。今さらながら、あの時さっさと席を外しておけば良かったと想っても遅すぎた。

「はつきりしなさいまし！朔夜さん！」

祖母の言葉と、神楽の不安そうな眼差しを両方から浴びて、狭い空間に押し込まれたような感覚に陥っている時、

「そうですね。朔夜さんお困りになられているようですし、お時間を少しお取りになられた方がよろしいのではないのでしょうか。おばあさま？朔夜さん。お時間がよろしければ、少し、お庭でも見て回られませんか？あちらに、木陰の良い場所がありますわ」

庭先に有る一本の大きな松の木の下に大きな小陰が出きいている。そこに二人分座れるくらいの椅子がある。そう云えば、昔はその下で本を片手に昼寝をしたものであった。

「まあ、そうですねえ〜それでは、御座を持って参りますからお二人でお話でも！」

神楽の口からその言葉を聞くや否やすぐに行動に移る祖母。このバイタリティーが有れば当分は平気だろうなと想う朔夜であった。

「先程はありがとうございます」

朔夜は祖母から解放された事に少し気分が落ち着いていた。

「何のことですか？」

神楽は、にこやかに微笑みながら少しとぼけたかのように言葉を発する。その事に気がつき、

「いえ、こちらの事です……それにしても、神楽さんは勝手に許嫁などと決められて……こういう事になって平気なのですか？」

遠回しに訊くよりは、はっきり訊いてしまった方が良かったらうと朔夜は想った。

「わたくしは嬉しく想っておりますの。こうしてお逢いして、はっきり自分の気持ち分かりましたわ。お写真だけでなく、こうしてお逢いして……どう云う方なのかはこれからおつき合いして行けば分かってくるとも思いますわ？でも、第一印象が良いという事は、何かしら御縁があった証拠だと想いますの。もともと殿方と面識は無いものですから世間知らずとは思ってはおりますが」

神楽は、ハッキリと自分の言葉で応える。それが、何も恥じらうこと無くいうものだから、逆に朔夜は動転してしまった。朔夜自身女性には疎い。というか、今までこういう感情にお目にかかった事は無いに等しかった。

「……本当は僕に彼女がいるかも知れないと想われた事は無いんですか？失礼。先程の、祖母との会話をお聞きすれば容易に考えられるでしょう？」

すると、

「『僕にはまだそんなゆとりも気持ちもございません』と云う事です。それは、お仕事の事が有るからだと想っておりますし。それに、朔夜さんのお母さまの事をお聞きしておりましたから……勝手に憶測かも知れませんが、朔夜さんは、女性に関して随分とトラウマを持たれているのでは？と察しておりましたから」

見事に云い当てられる。これは叶にも云われた事の無かつただけに、心に『ズシリ』と来た。

「母は、父の仕事の事を知っていながら、それでも一緒にいたりたかった……勘当同然で、二人は一緒になつたものの、最終的に理解が出来なくなつた母は結局離婚を決意した……後で祖母から聞かされた事です」

それは、祖母の口からだけで無く、親戚の間でも噂というネジマ

がった言葉で聞かされてきた。だから思った。決して結婚はしないと……

「それにしても、良いお天気ですね」

気を効かせたのか、神楽は話をそらす。

「女のわたくしからお誘い致しますのもお恥ずかしいのですが、今度の日曜日、ご都合が悪く無いのでしたら一日おつき合いして頂けませんか？」

突然の申し出に、戸惑った朔夜ではあったが、断る謂れも無く、それに女性に恥をかかせる訳にも行かず肯定の言葉を伝える。

「そうですね。それでは来週の日曜日、八月十六日にデートをしましょう。お盆過ぎですから、丁度帰省客くらいの人込みの少ない時期……上野の美術館にでも行きませんか？開いてれば良いのですが？調べておきますよ。御絡先を教えてください、改めてこちらから御連絡致します」

その言葉に、一瞬神楽は大きな瞳を見開いたが、直ぐににっこりと微笑んだ。その表情に、一瞬『ドキッ』とする朔夜ではあったが、そう見せないようにうつすらと笑顔を返したのであった。その先は、神楽の家族の話や、世間話に華が咲いたのであった。

4 未遂

未遂

久々の休息。そう想って、かえでは忙しい毎日の仕事への労働を省みて『フツ』とソファーに寄り掛かっていた。雑誌の編集の仕事は朝も無く夜も無く自らを奮い立たせないとやっていけないと自覚はしているものの、こうやってかえってのんびり過ごしてみると、見えない何かが手招きしてくるかの様で落ち着かない。

「やっぱり仕事している方が落ち着くわね」

『ヨツ』と腰をあげると想いっきり背伸びをしてみる。すると、今日やるべき事は全て済ませてしまったんだという事に気が付き、再びソファーに腰を下ろす事になる。

「夕飯も食べ終わったし……つままないから悪戯電話でもしようかな」

と、想い立ったのは早かった。ま、悪戯と云っても、今頃独り落ち込んでいるであろう叶に電話すると云うだけの事ではあったが。

昨日の夜に『遊びに来んか?』と誘われていたのを結局断った訳だが、実際こう一人でいると何かしら物さびしいのであった。この辺りがかえでの悪い癖だとは気付いているものの、改善しようとは想わないのである。

テーブルの脇に置いてある携帯電話を取り上げると、予め登録されている番号を呼び出そうと指を動かしていたその時、自らの頭上から水が携帯の液晶に『ピチャン』と落ちてきた事に気が付き、何だろうと手を動かす事をやめた。

どうやら天井から水滴が滴り落ちて来ているようだ。

「やだあゝ何これ〜?」

時間が経てば経つ程その量が増してくる。

かえでのアパートは五階建ての三階角部屋で、鉄筋造りでは有る

が、築十年でそう新しい所では無い。もしかしたら、上の住人が水を出しっ放しにしたのかも知れないなど、上の階に早めに文句を云いに行く事にした。

こういうケースは実は極稀に有る事だったりする。洗濯機の排水溝が壊れてしまつてたり、トイレの排水溝が壊れてたり……でも、このアパートに入つてからはこんな事は無かつた。だから、これ以上の被害を防ぐ為にはこうする事が最善の方法だったりするのである。下手に管理人を呼ぶのは避けたいものだ。そう感じたからこそ、真上の階に繋がる階段をのぼつて行つたのである。

「すみませーん」

インターフォンを鳴らしながらかえでは想つた。この住人って最近入つたばかりで、確か年頃は自分と同じくらいの女性よね。やっぱり洗濯機の排水溝かな？なんて、ぶきっちな人なのかしら？一瞬笑いたくなつたが次第に時間が経つにつれその余裕をかます事が出来なくなつてきた。

誰かいるはずなのに、実際誰も出てこないのである。外に設置されている、電機メーターも回っているのに人がいる気配が無い。魚眼レンズの先を覗いてみたら明かりはしっかり届いていた。

「そんなはずは無いわよね……」

だんだんと嫌な予感がしてきた。こういう時の女の勘と言っているのは、えてして正しくて、必ずと云つて何かが有ると踏んで間違いが無い。

「ダン！ダン！ダン！」

大きな音を響かせて細い拳で戸を叩く。がしかし誰も出てはこない。こうなつたら最終手段だとばかりに管理人を連れてくる事にした。こういう時、同じアパートに管理人が住んでいてくれているのは有り難いと想う。以前のアパートにはいなかったから……

「管理人さん！すみません！！四〇一の方の部屋が変なんです！合

錠持って来ていただけませんか！」

突然訪れた客は息せき切っていて、見た目にも只ならない様子な事に気が付かない訳は無い。

「あら？三〇一号室の佐簾さんじゃない。どうしたんです？こんな時間に！」

と云つてもまだ八時前。まだ日が沈んだくらの時間帯である。「訳は後で話しますから、直ちに合鍵お願いします！」

かえでは、管理人の重たい腰を叩くかのように息巻いていた。

「何号室ですって？」

「四〇一です！早く！急いで！！」

有無を云わせぬ押しの強いかえでの声色に、管理人も根負けして云われた通り鍵を手で四〇一へと階段をのぼって行ったのである。

「誰もいないはずないんです！私の部屋に、上から水が落ちて来て……もしかして、倒れているかも知れない！！」

鍵を開けようという瞬間、かえでは簡単に事情を説明した。鍵は合鍵によって簡単に開けられる。それをかいくぐるかのようにかえでは一目散に部屋へと入り込んで行った。

部屋の奥から水が流れ出している音が鳴り響く。電気も付けっぱなし。かえでの部屋と全く同じ作りの問取りに気付き、洗濯機を置く場所へと向つてみた。が、違っていた。これは……と、気が付いた時、赤い水が自らの瞳をとらえた。そしてその先を目で追った。

「キヤーーーーー！ーーーーー！！！」

かえでが見たものは、真っ黒な髪を湯舟に浸し、風呂場で手首から血を流して気を失っている女性だったのである。その声を聞き付けた管理人は、かえでの後ろで泡を吹く様にして腰をぬかしていた。かえでは慌てふためいてはいたが、心の中の突き動かす想いが、行動として表れ、水が溢れ出ている蛇口を捻り、

「管理人さん救急章を呼んで下さい！早く！！」
と、対処に励んでいた。

まず止血しなくてはと、そのびしょぬれで重たい女性をいったん

リビングへと運び出す。そして、流れ出る血を止めようと、自らのハンカチを取り出すと、手首の上できつく巻き付けた。

その女性の貧血した顔色は見るからにも死んでいるかのようで、忍びなく……かえでは目を背ける。

管理人も、流石に驚いてばかりはいられないと、『バタバタ』部屋を駆けずり回り始めた。一刻を争うこんな事態に、ふと、かえではテーブルの上に残された一枚の紙切れが目についた。

「何かしら、これは……」

かえでがその紙に気が付きそれを眺めるとそこには、

天使は全てを知っている

その一言が残されていた。

5 好奇心

好奇心

「ただいま」

次の日、予定通り朔夜は帰宅した。まだ頭の中は本調子にはなれなくて、足が地面に付いて無いそんな時の出来事であった。

「おはよ〜ん！朔夜ちゃん！」

何故だか分からないが、朝から妙なテンションのかえでが上がり込んでいる事に気が付き、一気に現実に戻されたような気分で一瞬目眩がした。

「よおー早かったなあ〜」

相変わらず、タンクトップ一枚で扇風機を一人占めしている叶。

「晩まで帰らんのかと思つとつたわ〜」

一瞬、ギロつと睨まれた気がしたが、まるで隠すかのように瞬時にニコリと笑った。

「お郡魔したのかい？」

朔夜は、自らの都屋に向おうとした通りがけに小声で囁く。叶は嫌みやなと言ふ表情をしたが、切り返した。

「えらいニユースがあるんやわな！かえでちゃん」

と、いうことで、昨日の夜の事の次第をかえでと叶は話し始めた。「えらいことやで！かえでちゃんのアバートって、下北沢の端の方やる？やっぱ何かあるで、これは！」

興味津々な叶に、

「考えてみれば、そうよね。云われるまで気が付きもしなかったわ……暇人はこういう時に役に立つと云うからそれかもね〜発想が飛んでて！」

少し、嫌みを込めてかえでは云う。忙しくて手が村けられなかったら、世間の事なんて疎くなるのも当たり前だとも云うかのごと

く。

「何云つてんねん。博識の常識！この時代何が起こつとるんか知つたらんかったらいかんのや！」

膨れつ面の叶は、かえでに舌を出す。

しかし、そんな事お構い無しに、

「でもね、あの後、不思議な事を聞いたのよね〜あの置き手紙？つていつのかしら？遺書？警察の話の小耳にすると『天使は全てを知っている』つての、前に起こつた自殺現場にも残されているんですけど！でも今回は、未遂で終わったから、事件の鍵は彼女が握っている可能性を大きく示唆出来るんじゃないかって警察は考えているみたいよ！」

かえでは事細かくは知らならしいが、そんな事を口走る。

「ニユースでも取り上げられて無かつたのに滅多に周じ遺書なんか残さんわな〜やっぱ何かあるで〜探偵じゃないけど何かわくわくするわ〜」

そんな不謹慎な事を云つて退ける叶に、朔夜は、

「叶？バイトは？行かなくて良いのかい？」

お決まりの止めの一言を申し渡す。これを引導と言つて差し支えないだろう。

「わあ〜しもた〜忘れとつた〜」

叶は、一目散で自らの部屋に入り支度を始める。

それを横目に、朔夜とかえでは和やかに話をすすめる。それが叶の耳に雑音として聞こえて気が散る。

「ほな！行つてくるわ〜後は帰つて来てからな〜かえでちゃん〜」

珍しく、かえでが手を振ってくれたのが嬉しくて、出がけの靴を危うく履き間違えそうになつたが、落ち着いて、何とか出発する事が出来たのは、この時良かったかも知れない。後で、大変な事に巻き込まれるのであるのだから。

「で、かえでちゃん？今日はその事だけに僕の所に来た訳では無い

でしょうか？もしかしてお仕事ですか？」

朔夜は、慌てふためいた様子の叶を送りだして笑ってはいたが、仕事の事となると真面目な顔になる。

「あはは……そう云う訳でも無いんだけど……」

仕事の話じゃ無い？はて？と、不思議そうに小首をかしげる朔夜。云い出しづらそうなかえでであった為か、

「叶の事ですか？」

少し悪戯っぽく笑って朔夜はかえでに問い返す。

「ま、あんな奴でも、誕生日くらいは祝ってやろうかなと想ってね……」

朔夜の部屋のコタツの上で『ポリポリ』と頬を人さし指で搔く癖は少し照れくさい時のかえでの癖である。

「誕生日？……あ、そう云えば、叶の誕生日は明後日ですねっすっかり忘れてましたよ」

あははははと、笑って誤魔化しておいた。そうする事によって、かえでに意地悪をするのも面白い。

「居候ですものね。朔夜ちゃんにとっては！」

少しムツとするかえで。いつもいつも居候扱いで叶にあたるかえではあったが、内心はそうは想っていないらしい。

しかし、叶にしても、かえでにしても感情表現が豊かなだけに、朔夜にとってこれは生きる上での絶好の楽しみなのである。

「で、サプライズ・パーティーならあたしも面白いし、いい趣向でしょ？どう？」

意外にアメリカナイズされてるなどは想ったが、快く引き受ける事にした。ま、バイトをクビになるのを覚悟していつも仕事に付き合わせているし、こういう時に何かしておくのも後々有利に立つかも知れないと云う気持ちもある。

「そうですね。面白そうだからその話乗りますよ！」

二人はその後、どう驚かせようかと云う意見で盛り上がるのであった。

6 危惧

危惧

叶のバイトは、午前、午後、共に掛け持ちのバイトである。

朝は、渋谷でレストランのウェイター。夕方からは、新宿歌舞伎町で、ホストという接客を中心にしたアルバイトである。

叶自身、ルックスを生かした仕事を選ぶのは訳ない事であった。

その上、人懐っこい性格が、客を呼んでくれるから店自体は簡単にクビにする訳にも行かず、上手く溶け込んでいる。

特に、ホストとしての仕事は正社員にならないかと誘われるまでに、人気を博していた。しかし、叶自身そのつもりは一切ない。ただの呼び込みアルバイトから始まったこの仕事。給料面ではかなり美味しいのである。しかしこの仕事をいつまで続けられるのかは疑問では有るが……

「お疲れ〜今日も一日大変な人気だったな〜」

と、源氏名のユウジはロッカールームで叶に笑いかけてくる。

昔から、女の子に人気があつて男友達の少なかつた叶にしてみれば、こうやって気軽に話し掛けて来られる事は滅多に無かつたが、この仕事を始めて、意外に友人が増えてきた。特に、開放感一杯のこの性格が役に立っているのである。別段、他の従業員に羨ましがられる事は無かつた。逆に可愛がられている。

「でもよ〜最近入ったあのマサキってやつ？かなり御指名多いやん！今まで、キョウの成績上まわる奴いなかったからさ〜気を抜いてると、追いこされちまうぜ？」

叶は、ここでの源氏名はそのままキョウという。しかしこの話に首を突っ込んで来たサトシは、忠告がてらにそう云う。

「う〜ん。あんま気にしてないわ。お客が誰を指名しようと勝手やん？一時の女性の安らぎを得られるんやったら俺嬉しい想うもん」

欲張るつもりは無い。ちゃんと給料さえ頂ければ何も差し支える事など無いと叶は想っている。

「良い子振るなって！ホントは内心メラメラしてるんじゃない？」

そんな余裕めいた叶に、サトシは少しカチンと来た。でも、敵意があつての事では無く叶の事を想って云つてくれる。だから叶はそんな言葉にいちいち怒る事も無い。

「ほら、来た。噂のマサキ！」

ボソリとサトシは叶に囁く。

「お疲れ様です」

マサキはドアから入って来て、挨拶を交わす。こういふ席では、特に新人は先輩後輩の位置付けがはっきりしてるから、無愛想ながらも、整った顔で言葉を掛けてくる。

「お疲れさんやな〜どうや？もう慣れたか？この仕事は？これから軽くみんなで食事でもして行かんか？」

叶は、早く打ち解けられるようにと気配り、気軽に声を掛ける。がしかし、

「あいにく、この後用事がありますので……」

硬派気取りの、マサキは誘われてもニコリともせず上手くかわしてくる。こういふ所が、きっと他の社員やバイト生にとつて苛つく原因であろうと叶は想った。でも、無理に誘うのも気が引ける。

「そうなんや……残念やな〜ほな、また今度な〜」

「それでは、また」

と、あっさり着替えが終わったマサキは裏口から出て行った。

「なんだ？あの態度は！」

サトシは、あの鋼鉄の面を壊したいともいわんばかりに『チツ』と舌打ちする。

「まあまあ、ええやんか。ヒトそれぞれ事情つちゅうもんが有るんやから〜」

周りを気にしながらも、仲間内のこういふたいざごきは仕事をやりにくくするだろうと簡単にフオーローする事にしている。でも、そ

の内何か度派手な事をやらかさないか心配な所もある。

「ほな、今日は軽くラーメンでも食って帰るか？」

と、今あがったばかりのバイト生を引き連れて近くのラーメン屋へと向うのであった。

それは、十時過ぎの頃の出来事である。

「そんじゃなく気を付けて帰れよな」

夕飯をいつも食べ損なう叶は満腹感をやっと感じながら、JR新宿駅の東口から渋谷まで出ようとみんなと別れを告げた。

余り遅くなると、電車に間に合わない。それを見越して、急ぎ足でただひたすら駅を目指す。家の鍵は教訓のように持ち出し忘れて無いかポケットを探りながら。

こうして、叶の一日は過ぎて行く。何も変わる事なく………だけど、叶には丁度良い仕事配分ではあった。

終電間近の駅のプラットホームは朝より空いていて開放感を感じる。そして渋谷で井の頭線に乗り換えようと白線の内側で、次やってくるであろう電車を待つ。

渋谷の駅前で買ういつもの夕刊。それを眺めながらいつ来るであろうかと、独り待ちぼうける。

それもいつもの事。慣れた感じで耳をすましていた。

そんな時、アナウンスが流れてくる。

「白線の内側でお持ち下さい。まもなく電車が参ります」

云われなくても、分かっとなるわと、新聞を折り畳むと白線ギリギリの所で終点の電車を待つ。それもいつもの事。

しかし、入ってきた電車が目の前に移る時、想わぬ事が起こったのである。

「ドンッ」

緩やかに止まろうとブレーキを掛け始めた電車に向かってプラットホームから思いつき突き落とされたのであった。

叶自身、何が起こったか分からずに、走り込んでくる電車の線路中央に頭から落ちてしまった。
向ってくる電真。

このままでは電車にぶつかると頭では分かっているものの、どう云う訳か、体が思うように動きが取れない。びくともしない身体を残しつつ、視線は電車を見据えていた。色んな事が脳裏を掠めて行く。でも早くどうにかしなければ……しきりに想いは募るが、まるで突然光を前に立ちすくむ猫のようにビクリとも動かない。

プラットホームの方で何か騒いでいる。

その声を聞きながら、叶の意識は朦朧とした。

そして、意識はその遠退いて行ったのであった。

突然鳴り響く、携帯の着信。

こんな遅くに、携帯が鳴るなんてどう云う事だ？

朔夜は、いつも充電している携帯の充電置き場に足を運んだ。

それは、明後日のサプライズ・パーティーに必要な物を取り繕っている最中の出来事であった。

携帯の蓋を開けると、知らない電話番号からの着信。全く予測が付かないが、鳴り止まない電話の着信音は悪戯電話では無さそうなので、受話器を取り上げる。

するとそれが、救急病院からの電話である事を取り上げてから初めて知り得たのである。

「確かに塚原叶は、僕の家の同居人です。そうですか、わかりました。それでは今からそちらに向います」

朔夜は、冷静に救急病院の名前を聞き終えると、簡単に、戸締まりをし、一気にアパートから駆け出した。

必要な持ち物を取り上げて。

救急病院は、お盆前だというのに混雑していた。

救急看護受付で、叶の移されている病室を聞き出すと、朔夜は足

早に歩き始める。そして、病室の扉を静かに開いた。

そこにはベッドにグッタリと横になっている叶の姿と、看護師がいるのが目に入った。

「都住さんですね？」

「はい」

事の次第がイマイチ掴めなかった朔夜は、担当であるその看護師に話を聞く。

「井の頭線の渋谷駅に飛び込んだのか、突き落とされたのかはハッキリ判かりませんが、線路で頭を打ち付けたようで今、安静に眠っておられます。が、右鎖骨を複雑骨折しているみたいですので今は鎮痛剤を打ち、簡単に処置はしておきました。今日は専門の外科医がお休みなので明日にでも緊急手術をしなければいけない状態です。それにしても、幸いでしたね。周りにいた方々の話だとプラットホームの横に設置されてある穴に最後の力を振り絞って、身を投じたらしく、何とか一命を守る事は出来たようです。彼は運が良かった。脳波を調べて異常が無いのですが……念のため一応眠っている時の脳波の方も検査しておきたいと思いますが、宜しいでしょうか？」

「こつこつ事は、家族の承諾も必要なのであるが、叶の生い立ちを考えると今となつては、そう云う訳には行かない。」

「考えてみれば朔夜は、叶の実家について知っている情報は皆無なのである。」

「取り敢えず、叔父さん宅へは報告しなければならぬであろう。」

しかし、夜間いたずらに心配を掛ける訳にも行かないかと、今日の所はこのまま連絡を取るのには避けようと想った。そして、眠っている間の脳波検査を承諾した。

「ところで、都住さんと云えば、夢占いに通であるとか？時々雑誌や本に目を通しておりますが……御本人様でしょうか？」

「意外な事を聞かれて戸惑う朔夜。」

「ええ、そうです……が」

「やはりそうなのですね。いやあ、こんな所でお目にかかれるとは
光栄です。患者さんのスケジュール帳を見て名前と電話番号が控え
られていたので、もしかしてそうではないかなと噂していたんです。
また論文など出されたら読ませて頂きます。それでは脳波検査の準
備も有りますので私はこの辺で失礼します」

そう云うと、静かにその部屋を後にして行く。確かに、朔夜は本
名で本を書いている。しかし、こんな所にまで影響をおまぼしてい
るとは想ってもいなかった。

朔夜はそんな中、ベッドに横になり気持ち良く寝息を立てている
叶の姿を確認すると、ホッと一安心して持って来た荷物を部屋に預
け夜間看護施設のこの病院を、静かに後にしたのである。

#7 不完全

不完全

次の朝早く、朔夜は必要であろう荷物を抱え、電車を乗り継ぎ叶のいる病院へと駆け込んだ。面会の決まっている時間一杯を使って出来るだけの事をしまつとそう想っていたのである。

サンサンと照りつける太陽は、晴天の青空を照らし続けている。今日は、手術も有るので付き添っていた方が良いだろうとそう想っていた。

入院している叶の都屋に入ると、既に眠りから醒めていた叶が朔夜の姿を目にする、

「遅いな〜ドジっちまつたわ〜」

と、笑顔で答えていた。

「自殺するような神経は持ち合わせて無いでしょう？何が起こったんだい？」

叶のその笑顔がちよつとしゃくに触ったものだから、思わず嫌みを云ってみる。

「さあ？さつぱりやわ。突然後ろから押されたものやから自分でも何が起こったか分からんのや……」

小首をかしげながら叶は不思議そうに答える。でも、犯人が誰なのか見当も付かない。その後、自ら恨みを買っ事などして無いとはつきり断言してくる辺り、叶はおめでたかったりする。

「でももうダメやと想ったわ〜あんなに恐怖、感じる事ってなかったもんな〜最後の最後に感謝したい人は、今朝、裏に底が厚い靴はかなんで良かった。ちゅこつちゃ！スニーカ〜やったから動きが取れたもん」

あつさりとそう答える辺り、かなりの強運の持ち主かも知れない。改めて、朔夜は想う。

「かえでちゃんには連絡しておいたから、明日にでも来ると想いますよ」

その言葉に、満面の笑みを浮かべる叶。どこまでもおめでたい。「鎖骨折れてるんやて……当分バイト休まなあかな〜入院費や、手術代もバカにならんのにドジった」

こういう所は、現実的である。

「叶には、リハビリして動けるようになるまで、安静にしておかなければなりませんね……最低二ヶ月は完治するのに掛かるでしょうから」

朔夜自身、無理はしてもらう訳には行かない。たとえ仕事が入ったとしても、自らが動ける範囲の仕事しかできないであろうとそう思った。仕事も選ばなければならぬ。まるで片腕を無くした気分である。

「あ、塚原さん。そろそろ手術の時間なので、用意しますね」

そこに一人の女看護師が入って来た。

「じゃあ、僕は手術室の待ち合い室にいますから。麻酔が効いてる間は大人しくしてるんですよ」

局部麻酔で手術と聞かされていたので、朔夜は警告する。

「ふえ〜い」

もともとジツとしているのが苦手な叶は、朔夜に念を押されると渋々答える。こんなに、女の看護師に囲まれると女の子大好きな叶にとつたら騒がずにいられまいとの配慮もあった。

そして、静かに朔夜は待合室へと歩いて行ったのである。

「都住さんですね？昨日は初めましての挨拶もなく要件のみで失礼しました」

待ち合い室で静かに一人で待っていると、昨夜救急担当してくれた看護師がやって来たのである。名札を見ると池田とある。

しかしその顔に見覚えがあると判断すると、朔夜はにっこりと微笑んだ。

「昨夜は叶がお世話になりました。今日は、この手術に関わってはいらっしゃらないのですか？」

手術服を身に纏っていない所を見ると一目瞭然ではあるが、一先ず訊いてみる。

「ええ、外科の事は私の範疇では無いものですから。所で御相談したい事がございました……」

そういうと、検査室へと案内された。

「これなのですが……こういう事は有る事なのでしょうか？」

長つたらしい真っ白な紙に、波をうつた線が刻まれているその紙を指差しながら池田は朔夜に問いかけた。

「これは？」

「昨夜から検査していた塚原さんの睡眠時の脳波の検査結果です」

しかし、朔夜には医学の知識が希薄でその脳波の検査結果がどう示されているのか理解に苦しんだ。

「僕にはこれを読み取る事が出来ないのです……一体どう云う事なのでしょう？」

素直に問い返す。

「あ、そうですね……これを説明すると……」

つまり、池田の云いたい事は、叶にはレム睡眠自体持ち合わせていないとのことなのである。人は、一晩に平均四、五回レム睡眠とノンレム睡眠を繰り返しながら眠りに付く。ちなみに、レム睡眠とは『急速眼球運動』を指し示し、ノンレムはその逆。つまり、人は夢を見ながら休息に付く。例え見ていないと想っていても、覚えていないだけであって、必ず見るものなのである。

しかし、計測器からは叶のレム睡眠の脳波計測が出来ず、常に一定のノンレム睡眠から覚醒に到っていると云うのだ。

「それでは、叶は夢を見ていないと云う訳ですか？そんな事が有って良いはずが……測定器が故障していたと云う事はあり得ないんですか？」

事故での後遺症？困惑する朔夜。しかし確か、以前聞いた事が有る。あれは中学生の時、叶は夢を見ないとそう確かに云った。しかし、自らはそれを否定した。夢は必ず見るものだを意識づけられていたのだから……

「私達も、故障なのかどうか確かめてはみたのですが、決して故障していた訳ではないのです。そこで夢に詳しい都住さんの意見を聞いてみたいと思ひまして」

そこまで言うと、池田は朔夜の言葉を待った。

こう云った現象が起こる確率。それは自分の知識には無かった。だから、医学的にも科学的にもこの事象にどう向かい合ったら良いのか分からず頭が混乱したのである。

考えてみれば、陰陽師を生業としている叶白身、夢に関しては口出しもしてこなかった。ただ悪夢よけのお札が有る事だけは知っているような事を口走りた事はあったが、朔夜の前で使った事は一度たりと無い。

本当に、叶は夢を見ないのか？ただただその事が頭から離れない。「都住さん？」

考え込んでいる朔夜を不思議そうに眺める池田の視線に気付き、「あ、このことは叶には告知したのですか？」

医学の世界で、法律的に他人にこういった事を漏らしてはいけないと云う秘守義務がある。その事を理解した上で、今回池田は朔夜に口外している訳だ。

「いえ、まだこの事は告知していません。医学的にこう云ったケースは無かった為、私達も戸惑っております……」

「分かりました。それならば、この事は叶には秘密にしておいて下さい。現に眠っている時だけの異常な訳でしょうか？」

何とか説得したものの、両者とも合点が行かない。

それに、普通に脳波を検査しても異常は見られなかった訳だ。そう考えると、普段の生活。人体的に問題がある訳では無いとそう判断したのか、池田はそれ以上口出しをしてはこなかった。

取り敢えずこの時は特異体質。そう考えておく事に朔夜はして
おきたかったのである。

8 偶然

偶然

「お目覚めですか？叶」

手術も無事終わり、叶は痛みの余り一時間ほど点滴を受けている間グッタリとベッドで睡眠をとっていた。

「ホンマ悪いな〜これで当分の間、朔夜に顔が上がりゃん訳や……」
借りなんていくらでも作っているはずなのに、そんな事を忘れて
いるかのように叶はボンヤリと呟く。

「別に構いませんよ。そんな事より、安静にしていして下さいね。治
ったらビシバシ働いてもらおう事になるんですから」

冷静に微笑む朔夜。

「なあ、それにしてもなんでオレ狙ったんやろか？全く見当がつか
んわ」

「それに関しては、警察が動いてくれていますから、叶はこれ以上
考える事は有りませんよ。どうやら、殺人未遂事件として捜査を始
めているそうですから」

「う〜ん。でもなあ〜」

「でも何です？」

「本気で殺そうと考えていたんやったら、来る直前に突き落とせば
済むことやろ？あんな時間に猶予を与える必要なんて無かったんぢ
やうか？」

確かに叶の云う事は的を射ている。

何かの警告めいた事なのであるうか？そう考えると、朔夜は静か
に考え込んだ。

「ま、事はこのくらいで済んだんやからまだみつけもんやったって
考えるようにするわ〜朔夜が考え込む事ないやん？」

そうは云われても、ここ最近の下北沢での事件。そして、それが

叶にまで及ぶとなるとこれは一連に何かが起こっていると考えても不思議ではなくなっていた。

「基本的に、事件と云うものは月齢や、季節によって偏りが有るものなのですよ……それを考えに入れると不適切な気がします。この事件に関しては、僕も探りを入れてみる事にしておきます」

そう云うと、面会時間が過ぎるのを確認する。

「じゃあ、また明日来ますから、絶対安静ですよ！」

レム睡眠欠如の叶を案じながらも朔夜は釘を打って部屋を後にした。

「ほなな〜」

軽く朔夜に手を振って、朔夜は再び眠りに就いていくのであった。

朔夜は、今日持って帰らないといけない物たちを袋に詰めて病室を出て階段をおりる。そんな時の出来事であった。

「もしかして、朔夜さんではありませんか？」

後方から声が掛かった。

「あ、神楽さん……」

意外な所で出逢ったことに、朔夜は胸を掴まれるような想いであった。

「どうしたんです？もしかしてこの病院にどなたかお知り合いでも入院されているのですか？」

神楽と初めて私服で対面した。

何を着てもそつなく着こなしている神楽。フォーマル姿の彼女も意外に似合っているなと想った。和服姿の彼女も何も違和感を感じさせずにいたが、この姿も魅力的である。

「ええ、事故にあった同居人を見舞いにきたんですよ。神楽さんは？」

「わたくしは、母のお見舞いをしに」

少し寂し気に微笑む。

「それでしたら、明日にでもお見舞いに伺いますよ。まだお母さま

にお会いしていませんし」

考えてみれば、先日の二人での話の中に神楽の母が入院していると云う事は聞いていた。まさか偶然にもこの病院だとは想ってもいなかったが。

「本当ですか？それでしたら、明日にでもいらして下さいませ。わたくしも、朔夜さんの同居人さんのお見舞いをしたいと想っておりますし」

神楽は控えめに微笑む。

叶に神楽を逢わせるのはどうだろうとは想ったが、気持ちだけでも有り難く感じている。

「今日はこれでお帰りになられるんでしょう？わたくしも御一緒にしても宜しいでしょうか？」

「もちろんです。では行きましょうか？」

こうして二人はゆっくりと階段を下りて行ったのである。

「実は明日は、その同居人の……塚原叶というんですが……誕生日なのです。不運にもこんな事になりちよつとバタバタしているのですが」

簡単な成り行きを話し、朔夜は近くの駅まで話を続けた。

「それは大変に御不運でしたね……そう云えば確か、お仕事で手伝ってもらっていると言ってらした方ですわね？」

落ち着いた物腰で問いかける神楽。

「ええ、そうです。もう、中学校の頃からの縁ですつと何かにつけ一緒に行動する仲間なんです」

「陰陽師の相方なんて凄く頼もしいですね？」

「良く付き合ってくれていると感謝しているんですよ。叶には「ちよつと、色をつけておいたが、確かに叶には感謝はしている。」

そんな話をしながら、穏やかな時間を過ごす。時が経つのが早いのか、最寄りの駅まで近く感じられた。

「では、わたくしはこちらの路線を歩きますので、この辺で失礼致

しますわ」

神楽は、朔夜とは反対方面の電車に乗り込まなくてはならなくて、切符売り場でお別れの挨拶をする。

「ではまた明日。あ、日曜日の件は少し待っていただけでしようか？まだ、美術館の調べが済んで無いものですから……」

折角、約束をしたのに、こう忙しいと肝心な事を見落としてしまう。

「結構ですよ。朔夜さんもお忙しいようですし、その事は重々理解しておりますから。時間に余裕ができるようでしたら連絡下さりませ」

朔夜の気持ちを探してか、神楽は微笑んでそう言葉を返す。

「それでは失礼致しますわ」

一度軽くお辞儀をして神楽はゆっくりとした足取りでプラットフォームへの階段をのぼりはじめる。

朔夜はその姿を見送ると、暫くしてから反対の方向へと歩き始めた。偶然が呼び起こしたこの状況に感謝しながら。

#9 真実

真実

「バカ~~~~~!」

廊下の端まで聞こえるような甲高い声が、四人部屋の病室を揺るがした。

「あ〜ん!かえでちゃん、声でかい〜」

周りの入院患者が、何事だと云わんばかりに一齐に叶のベッドに注目した。

「……」

その事に我に返るようにはつと気がついたのか、かえでは真っ赤になつて備え付けの椅子に腰を下ろした。

「バカだからバカだつて云つたまでよ……」

せっかく用意していたバースデイプレゼントをこんな所で渡すハメになるなど思つてもいかなかったからである。しかも、楽しみにしていたサプライズ・パーティーもお流れ。

苦心して考えていた事が、水の泡になつた事を考えると、かえではいてもたつてもいられずそう云うしか無かつたのである。

「心配してくれてたんちゃうんか?かえでちゃん!」

少し身を捻るようにして、かえでの方に身体を向ける。そうしないと表情が見えない。

「ペシリ」

そんな叶の頬に一発平手打ちが入る。入ると云つてもただ軽くはたいただけだが。

「……事情は朔夜ちゃんから聞いたわ。これ誕生日プレゼント……」

そう云うと、一枚の映画のチケットを渡された。

「なん?あ、これ俺が見に行きたかつたやつやん!」

そう云うと、片手でそれを受け取り眺めた。

「ここにもう一枚有るんだけど？」

かえではふて腐れたように膝に肘をつく。

「あ、もしかして、一緒に行ってくれる予定やったんか？……そんなあ……」

『シユン』とへこむ叶の心情は判りやすかった。どこまでも女運が無い。せつかく用意してくれたチャンスがあつさり打ち砕かれた訳で有るから。

「この怪我、完治する頃まではやってるから……さつさと治しなさいよ！」

そっぽ向いて赤く頬を染めるかえでに気が付き、

「かえでちゃん、可愛い……」

云つてはならない一言がポツリと叶の口からもれる。それを聴き逃さなかつたかえでは、

「今、なんて云つた？」

まるで、某、映画の貞子のような表情で叶を睨み付けたのである。

「それでは、お大事に……」

朔夜は、神樂の母に挨拶をして、その部屋を後にした。今日は、予定では神樂と共にお見舞いをする事になっていたのに、時間になつても現れない神樂を持ち続ける訳にもゆかず、ナースステーションで部屋を調べてもらい、一足先にお見舞いした訳である。

朔夜は、持ち合わせ場所を間違つたか、時間を間違つたのか、色々考えたが結局分からないままであつた。

もしかして、入れ違いで先に行ってしまったのかとも思い、足を向けては見たが結局は違つた。

「どうしたのでしょうか？」

連絡すべき電話番号を携帯電話で鳴らしてみても誰も出る様子は無かつた。

仕方無しに、叶のいる病室へと向う。

広い病院では無いので、階段を降りようとしたその時、まるで昨

日のシュチュエーションのように声を掛けられた。

「朔夜さん？」

聞き慣れない声に振り返ると、そこには今まで捜していた神楽が立っていた。

「どうしたんです？その声は……」

まるで初めて聞くかのようなハスキーな声であった。

「すみません。昨夜、冷房をかけ過ぎて寝てしまったもので……鳳邪をひいたみたいです……」

言葉の間に、『コンコン』と咳き込むのが耳に入った。

意外に、おつちよこちよいな人なのかな？と想いつつも、朔夜は心配げに、

「酷い咳ですね……大丈夫ですか？」

「はい……申し訳ございませんわ。あの、居候さんの……お見舞いだけでも出来るようで良かったです……」

「連絡下されば、無理して来て頂かなくても良かったですよ。今日は、これから帰って安静にしておいて下さい」

顔つきが青ざめた表椿な上に、この声を聞いていると申し訳なかつたと想う朔夜。

「また日を改めても……」

そう云おうとしたが、

「せっかく、お見舞いの品も買って来た事ですし……このままお伺い致しますわ」

神楽はそれでもニコニコ微笑んだ。

確かに、ここまで来てもらっておいて、帰れと言うのも申し訳ない。そう考えると、朔夜は叶がいる病室へと案内した。

「もう帰る！」

今の今まで痴話喧嘩が続いたかのような有り様の所に、昨夜と神楽は叶の病室に入り込んだ。

「あ、朔夜ちゃん！聞いてよ！このろくでなしがね！……」

神楽がいる事など目にも入って無いかのようによくしたてた。

「かえでちゃん。落ち着いて下さい。ここ病院なんですよ。周りの人に迷惑がかかるでしょ？」

いつもの事ながら、叶とかえでの喧嘩は見なれているのである。

だからこそ、今まで、この三人が上手くやって来れた理由も分りやすい。仲裁に入る？か、ほっておくか？そのどちらかだ。

そんな中、叶が後ろに控えた一人の女性に気が付いた。

「どちらさん？」

一瞬、空気が変わる。

「あ、僕の……許嫁の……錦織神楽さんですよ」

戸惑いながらも朔夜は応えた。

「許嫁……？」

かえでと叶は一瞬絶句した。

「朔夜ちゃん……そんな人いたの？」

「ええ……まあ……」

少し照れながら答える朔夜に、

「スケベ……」

叶はひがむかのように言葉をどもらせた。

「錦織神楽……と申します……」

礼儀正しく頭を下げるその姿に、

「かえでちゃん。見習わな」

流し目でかえでを見る。

ムツとしたが、どう見ても穏やかさをかもし出す彼女に負けている事に気が付き、叶が云う事は正しいとこの時だけはそう想った。

「あゝ！でも、何処かで逢った事ない？変やなく気のせいかな」

美人と分かっつての言葉の弾みなのか、それとも真実なのか？それは分からないが、叶は、その顔に見覚え有るかのように表情を一変した。

「いえ……初対面ですわ……事故で怪我をなされたとか？こちら、お見舞いの品です……早く治られるとよろしいですわね……」

嫌な顔一つせず、神楽は答える。

「叶！あんたは何でも知り合いにするつもり！？」

呆れて物が云えないわと、かえでは、

「じゃあ、あたしそろそろ仕事に行くね。朔夜ちゃん仕事入ったら連絡するね……バイバイッ、叶！」

表面上微笑みながらも、叶には眉間に皺を寄せながら挨拶してかえではさっさと病室を後にした。

「なんや〜かえでちゃんあの態度！……でもそこがええねん〜」

一人の世界に入っていく叶であった。

こういつ時の叶を見る度に、打たれ強いなど微笑む朔夜であった。

「でも、ホンマどっかで会ってへん？」

叶は『マジマジ』と神楽の顔を見る。

普通ここまでされると失礼だろう？と想える程に、叶は神楽を見ていた。でも、そんな事は気にしないで、神楽は優しく否定の言葉を告げる。そんなやり取りをしていた時、突然叶の身に眠気が襲って来た。

「あれ？変やな〜昨日あれだけ寝たのに、眠くなってきた。薬のせいかな〜悪いんやけど、今日はこの辺で……」

云い終わらないままに、まるで充電が切れたかのように叶は眠りに落ち込んでいった。

その様子を見ていた朔夜は仕方ないと神楽を見た。今日はこの辺で失礼して、神楽を休ませなければと想ったからである。

しかし、神楽を見た瞬間、何か今まで気付かなかった違和感を感じた。それは勘というよりも、もっと適切に云い換える事が無いような何か……神楽の目が一瞬、叶の眠りを楽しんでいるかのような何か……

そしてすぐさまハッキリとこの人は、神楽とは違う！と朔夜は気付いたのである。

しかしその気持ちを抱えつつも、笑顔で、

「じゃあ、行きましようか？」

優しくこの病室を出るように、言葉で促した。早く確かめなければいけない事のように想われて……

病室を出て、朔夜と神楽は階段まで歩く。

何故気が付かなかった？

考えてみれば、こんなに神楽は背が高くは無かった。それに、完璧に似てはいるものの、表情が固い。それを見越して朔夜は廊下を歩きながら考える。そして、一か八かの賭けに出たのである。

神楽の腕を掴むと、丁度男子トイレを通り過ぎる時、その中に引きずり込んだのだった。

「きゃあ！！」

悲鳴を消すかのごとく、ドアを閉めると、朔夜は単刀直入に問う。

「あなたは神楽さんではありませんね……？」

真剣に問う朔夜。

「何の事ですの……？ここは殿方の……」

恥ずかしいとでもいうかのような素振り、神楽はそこから出ようとするが、朔夜には確信があった。

「お芝居はそのくらいにして頂けませんか？神楽さんの弟くん？」

その言葉に、一瞬戸惑った様子を見せたが、突然、諦めたかのように大声で笑い出す。

「あはははは、分かった？意外に早かったね、結構上手くやってたつもりなんだけどなあ？」

ぬぐい取るかのようにして、頭からカツラを取る。それを手に、トイレの壁に寄り掛かった。

「姉さんから聞いてるだろ？オレ双子の弟の雅樹。キョウとはバイトで逢ってるから……まさかあんな反応されるとは誤算だったよ。あのお人好しに気付かれるなんて想いもしなかった。甘かったな……」

…でもここで分からなかったら、もつと事件起してやろうと想ったんだけどね〜気が変わったよ!」

何の事を言ってるのか朔夜には判らなかった。

「事件?」

「そう。ここ最近の下北沢での事件だよ」

それでも、朔夜には分からなかった。何を云っているんだ? 心の中でその事が空回りする。

「俺は天使なんだよ。これでも判らない?」

天使は全てを知っている

確かそんな言葉だった。

「賭けをしません? 次起こる下北沢での事件を解決出来れば都住朔夜……お前の勝ち。姉、神楽との事も大目に見てやる。もし解決出来なければ。神楽から身をひけ! 期限は来週の日曜日。それまでに二件の事件を起す。そうだなあ特別にハンデをあげよう……このままだと分が悪すぎるだろうからね〜ヒントは、『F K N 24』」

まるで恨みでもあるかのような表情で朔夜を睨み付ける。

「君が今までの犯行をしているのかい? そんな事を話せば君は……」

「俺はね、一つも自らの手を汚して犯行に及んではない、俺はね

……」
朔夜の耳許で囁く。

「!?!?」

「法には触れて無いさ。どうする? この賭け乗ってみるか? 頼みの綱は、キョウだったのにさ〜それがこの有り様。この状況を突破出来る物ならしてみな!」

両手を振り上げながら、してやったりの表情で朔夜を見る。

「何も云わないならこの賭けを承諾した事とみなすが異存はないな

「？」

「……もしかして、君が叶を……」

普段冷静な朔夜に全く似つかわしくない表情で強張っている。

「俺だけど、俺ではない……」

そう云うと、カツラを被りなおし朔夜を振り返りもせずせせら笑いながら横を通り過ぎた。

今、朔夜の頭の中は混乱していた。

今の今までこいつは何を云っていたんだ!?

賭けだって？

ぐるぐると渦を巻くその頭は思考回路を遮断した。

俺は誰かとは違う、完璧な陰陽師だからね……

幽かに囁かれたその言葉が、朔夜の頭を駆け巡っていた。

T O B E C O N T I N U E D

#9 真実（後書き）

後編へ続きます。もし宜しければ、後編もお読みくださいませ。
このシリーズまだまだ続きます。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5499d/>

占夢者人の夢 ~ 弐ノ巻・前編 ~

2009年3月24日10時49分発行